

## 徒然草

### ミセスマラティの贈り物

鈴木博明  
都市開発専門家

四十年近く、色々な開発プロジェクトに関わってきたが、忘れ難いものがいくつかある。忘れ難いものというよりは、忘れ難い人達との出会いだと思う。もう、二十数年前のことだ。南インドのチェンナイにあるタミルナド州政府の都市及び上下水道省で、世銀が融資するタミルナド都市開発プロジェクト II の事前審査ミッションの結果報告をしていた。この会議で、ミセスマラティと呼ばれていた、サリーがよく似合う理知的な次官から、スラムの公共トイレの建設をプロジェクトに追加して欲しいとの要請があった。「厄介な要請が出てきたなー」というのが私の偽らざる第一反応であった。

タミルナド都市開発プロジェクト II の目的は、インド市場で債券を発行し資金調達の出来る持続可能な都市開発基金を設立することだった。市場メカニズムに基づく都市開発基金と貧困対策という社会的な目的を持つスラムの公共トイレの建設は、全く違う意味合いを持つ。プロジェクトデザインをする時の鉄則、KISS : Keep It Stupid Simple にも反する。より現実的な問題として、プロジェクトのデザインと準備は既にほぼ完了しており、その時点で新たなコンポーネントを追加すると、役員会の日程が守れなくなる危険もあった。それらの考えが頭を駆け巡り、どうやってこの要請を断ろうかと考えていたら、ミセスマラティから、「今即答してくれなくてもいいから、とにかく現場を見て欲しい」と言われた。

そこで会議は打ち切り、彼女の案内で、チェンナイ郊外のスラムを訪問した。モンスーンの季節で、スラムはぬかるんでいた。真っ黒な愛くるしい目をした子供達が牛の寝そべる水たまりで遊んでいた。こんな環境で、水道もトイレもなければ、伝染病はあつというまに拡がるだろうと思った。こんな現場を視てしまったら、KISS や役員会の日程などとは言っていられなくなる。左脳は「やるなやるな」と言っているが、右脳は「やるきゃないでしょう」と言ってくる。一緒にいた、同僚の環境専門家に目でゴーサインの合図を出した。そうだ、「彼はこの町の出身だった。このコンポーネントは彼に任せよう」。

サイト訪問の後、ミセスマラティにパイロットプロジェクトとして、最小限の公共トイレの建設を追加することを伝えた。直ぐプロジェクトデザインに取り掛かった。ミセスマラティの意見を尊重し、公共トイレの他に、コミュニティーの為の共同の水場、歩道、街路灯、側溝の整備も行うこととした。ハードの側面は次々に決まっていくが、公共トイレの維持管理については、頭を悩ました。色々な文献にあたったが、インドの公共トイレは、繁華街の民間の商業施設を除き、維持管理が不十分なため、悉く失敗していることが分か

った。特にスラムでは、住民が電球や扉まではがして持って行ってしまいうり様だ。しっかりと維持管理体制を整えないと、タミルナドの公共トイレも半年も経たないうちに、使い物にならなくなってしまう危険があった。「誰が公共トイレを一番必要としているのだろうか?」。野郎はトイレがなくても何とかなるが、スラムの女性達は暗くなるまで我慢して、人気の少ない野原で用を足す。健康に悪影響があるだけではなく、時にはレイプされ、命が危険にさらされることもある。

そこで、公共トイレを一番必要としている、スラムの女性達を組織してトイレの維持管理を任せることにした。また、NGO の提案を入れ、トイレの各ユニットを特定の数の家庭に割り振り、家庭の主婦に鍵を渡すこととした。トイレの掃除や市から支給される消毒薬の散布は、各グループごとに行うこととした。こうすることにより、公共財である、トイレを半私有材化し、維持管理の責任を明確にして、維持管理のインセンティブを高める狙いであった。



チェンナイのスラム

出典 Milei.vencel, 2011, WIKIMEDIA  
COMMONS

プロジェクトは実施段階に移行し、公共トイレが完成したので、現場視察に行った。スラムには楽隊が入り、爆竹が鳴るといってお祭り騒ぎであった。スラムの住民は公共トイレの完成を待ち侘びていたに違いない。サリーの正装をした一人の老女が私のほうにやってきて、微笑みながら両手を合わせてヒンズー式の丁寧な挨拶をしてくれた。私は彼女の眼に涙が光っていたことを忘れない。この人はきつとこの歳になるまで、トイレのないスラムで生活してきたのだ

と思った。私は、このスラムの公共トイレを作ることができただけでも、開発の仕事をしてきた甲斐があったと思った。世銀での昇進や上司の評価より、もっと大切なことがあると思った。私は、この老女の微笑みと涙のおかげで、世銀を退職するまで、何とか頑張ることができたような気がする。<sup>1</sup>

スラムの女性達のおかげで、公共トイレはよく維持管理され、評判が良かった。彼女達は水場で井戸端会議をするようになった。その中から、お金を出し合いマイクロファイナンス基金を設立し、相互補助活動を行うグループが生まれた。このような、思ってもみなか

---

<sup>1</sup> この節は、著者の「世界銀行ダイアリー：グローバルキャリアのすすめ」（上智大学国際開発協力人材育成センター監修／国際開発ジャーナル社）より抜粋したもの。

った、プロジェクトの副次効果としてのソーシャルアセットの形成は、目から鱗の取れるような発見であった。パイロットプロジェクトの成果に満足したミセスマラティは、独自の州政府予算を使って、より多くのスラムで公共トイレの建設を行った。公共トイレは数多くのスラム住民、特に女性住民への、ミセスマラティからの命の贈り物だ。私も都市開発専門家として、このプロジェクトから、多くの事を学ばせてもらった。

世銀勤務の最後の年の 2013 年に公共交通指向型開発のワークショップに出席するため、チェンナイを再訪した。二十年ぶりに再会した、都市開発基金設立に関わった、タミルナド州政府の元官僚達や基金の元 CEO が集まり、夕食会を開いてくれた。ミセスマラティには会えなかったので、消息を訪ねると、健康状態が思わしくない様であった。ワシントン DC に帰ってから、しばらくして、ミセスマラティの訃報が届いた。いい人ほど早く旅立ってしまう。「上を向いて歩こう」。目をつぶると、天国でミセスマラティが数多くのスラム住民から慕われている情景が目に浮かんだ。

(2019年の年の瀬、ワシントン DC にて。)